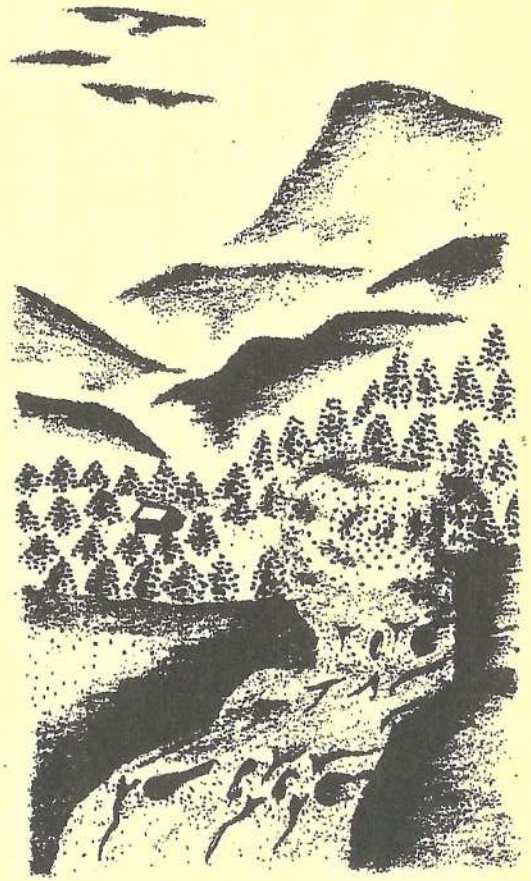
湧水



湧水　第九号　平成三十年五月　発行

千代田岳精会　自作自詠俳句研修会

湧水第九号　目次

作者俳号	名	頁
伊藤彰一	（しょう）	1
鵜飼てるお	（輝夫）	2
神田つねこ	（恒子）	3
菊地龍駿	（利廣）	4
近藤まき	（まき子）	5
座間宗萌	（文子）	6
塩月たかし	（崇史）	7
鈴木陵人	（重成）	8
滝沢はる	（はる）	9
田尻てるよ	（映代）	10
徳本順治	（順治）	11
橋本千舟	（隆一）	12
八田玄猷	（豊）	13
藤原　壽	（壽子）	14
細川をさむ	（修）	15
前田道人	（道紀）	16
磯田烏城	（貞二）	17
岩崎泰俊	（泰俊）	18
随筆	座間宗萌	

「初投句」

伊藤しょう（彰一）

初投句はりきりすぎて五七六
初詣肩ふれ合うて坂登る
降る雪や積らぬ事を祈るのみ
垣根ごしふくらむ梅のつぼみかな
ウォーキング帽子は汗にそぼ濡れる
朝となる今日も真夏の日とならむ
校庭に一本の大銀杏黄葉
リビングに色を競ひてヒアシンス

「母の背」

鵜飼てるお（輝夫）

悴むは我が身と街の灯りかな
帰り道沈丁の香に迎へられ
胡桃の実拾ふ子たちの声はづむ
「いらつしやい」日除けむこうに親爺かな
納涼祭しりつぱしよりの若い衆
母の背を流す想ひで墓洗ひ
秋晴れや池面に揺れる木々の陰
青い空日の丸映へて文化の日

「神宮の杜」　神田つねこ（恒子）

付そふて帰宅の指先悴みぬ
バス降りて春星捜す深夜かな
馬酔木垣夕日に映ゆる紅の房
木々の香に包まれ歩む五月かな
友の絵や上野の森に蝉の鳴く
水澄んで川底に魚気配かな
神宮の杜の小径や初紅葉
年迎ふバス客の荷の嵩の増し

「女正月」　菊地龍駿（利廣）

女正月朝餉支度のお父さん
お見舞ひやつくばの風と春の星
画きあげて又筆はこぶ春灯
まばたきは母の慈愛か春の星
夕暮や空家の庭の沈丁花
街路樹の陰を日除けに乳母車
水澄める熊野川（ゆうのがわ）や変りなく
ゆく年の漢詩の会や友と酒

「水澄む」　近藤まき（まき子）

水仙の揃ひて我を見つめをり
沈丁花呆けし母の車椅子
親が来てコーラスとなる燕の子
日めくりの暦半ばや夏に入る
片側に日覆の店や神保町
のつたりと猫の涼みてぶどう棚
文化の日図書館起点のウォーキング
水澄むや底にしなやか藻のあらは

「春一番」　座間宗萌（文子）

春一番恋の予感の胸さわぎ
山門を潜れば浄土夏木立
紫陽花や青白き色定まらず
槻の木の一本目印墓参り
水澄みて小石掠める魚影かな
叙勲者の胸に橘文化の日
手習ひの俳句ひねりて年歩む
ねんねこの子は笑み浮かべまどろみぬ

「香　雨　水」

塩月たかし（崇史）

旅戻る妻を出迎へ女正月
沈丁花窓を開けおく夕べかな
春灯やそぼふる雨に肩を抱く
初夏や如来訪ねて深大寺
名代なる貴船の宿や鮎づくし
快晴の富士を仰ぎて墓参かな
水澄みて子等の声なき築場かな
雨の路地ネオンの新宿師走かな

「人　星　花」

鈴木陵人（重成）

友集ひ吟じ尽せり春の星
沈丁の小庭になごみ運びけり
花の海群れ人小さく呑み込めり
時候から話の尽きぬ日除けかな
この年も墓前に立つや蝉時雨
釣り人の黙し佇み水や澄む
銀漢の声無く光る夜空かな
行く年や運動場の赤帽子

「春の星」　　滝沢はる（はる）

悴みて足早に過ぐ堤かな
初詣絵馬に願ひをたくす吾
春の星べちやくちや姉と長電話
沈丁の香に誘われて路地に入る
夜桜や両岸を行く人多し
公園の桜風雨にうたれ散る
押し花に摘みとるや四つ葉のクローバー
境内の茅の輪くぐるや右ひだり

「伽羅」　　田尻てるよ（映代）

悴む手父のポッケにそっと入れ
白壁の土蔵のくづれ冬ざるる
伽羅の香の薫る衣や春の星
香りたつ初たけのこやおすそわけ
たどたどし文字子よりの暑中見舞来
華やぎのゆかたざらひや江戸小唄
から松の落葉の音やかすかなり
黒柿をひと枝たまはる八幡宮

「小正月」　　徳本順治（順治）

小正月祝ひ納めのひとり酒
不夜城や暗にひとつの春の星
夜に入りて春燈を背に屋台酒
日覆して主人客呼ぶ鮮魚店
夕涼み特等席は孫が占め
亡き父母と洗ひし墓や香を薫く
文化の日軒に掲げる国旗なし
年行くや兄を送りてはや三年

「筍」　　橋本千舟（隆一）

三世代集ひ夕餉や女正月
悴めど癖文字しかと句帳かな
水温む鯉反転の泥煙り
筍に鍬の一撃爺無言
待つと言ふ時間の大事花氷
植継の樅の木立や小鳥来る
底紅や老犬ねまるベビーカー
冷まじやフォルティッシモの堰の音

「十三夜」　　八田玄猷（豊）

校門に旅立ち祝ふ老桜
山吹や花の名のこる日暮れ里
孫娘歩く炎暑の段葛
夕立ちの残しし一滴きらきらと
十三夜輝き増して夜更ける
青空に子等の弾ける運動会
小春日の日溜まり求め三毛の猫
流れ星途絶えて空にオリオン座

「沈丁花」　　藤原壽（壽子）

雨の夜のかをり尚濃き桜もち
銭湯とシャボンと母と沈丁花
電柱をしばし日除けの赤信号
水澄むや己が心の反比例
キャッチボール空一面の赤とんぼ
縁側に足投げ出して西瓜食ぶ
木枯や指差し点検はいはいはい
行く年や修行の僧の鈴ひびく

「春の星」

細川をさむ（修）

露天風呂妻と見上げし春の星
春の灯や独りとなりし鍋料理
在りし日の母の面影薔薇に見る
大西日孫が手を振る曲がり角
迎火や炎にふつと妻の影
句会終へ帰る我家のちちろかな
無人駅見送る妹や冬の雨
あのときの妻思ふなり冬桜

「梟の目」

前田道人（道紀）

梟の片目で覗く地球かな
初詣鎌倉大佛ちと痩せる
二階より滑り降り来てお年玉
おでん酒最終電車の疾うに過ぎ
沈々とただ深々と雪二尺
金魚掬い子分に負けて泣く子かな
どうしようもなく紺であり庭の茄子
文化の日五十娘のピカソ好き

「寒月」　　磯田烏城（貞二）

病める妻寒月仰ぎ何思ふ
いつの間に虫の音絶ゆる裏小路
扨も卒寿来し方思ふ百日紅
坪庭に一輪咲きそむ寒椿
数の子を噛めば昭和の味がする　（朝日）
今一度文字を正して日記果つ　（朝日）
冬紅葉色を尽して惜げなく　（朝日）
老いて知る春待つ心切なるを　（朝日）

「初句会」　　岩崎泰俊（泰俊）

いつまでも新人ですと初句会
お日様の力及ばぬ寒さかな　（朝日）
生きてゐて遊ぶ俳諧去年今年　（朝日）
午後からのぶらぶら歩き日脚伸ぶ　（ＮＨＫ）
子の帰るまでの長き日大試験　（ＮＨＫ）
歩くこと楽になりたる白露かな　（朝日）
小雨にも命ふるはせ秋の蝉　（朝日）
悲なく生きて老老冬支度　（朝日）

随想　「発見と感動」

座間　宗萌

六十過ぎの手習いで俳句を始めて早一年。

歳時記も購入し、折に触れ頁をめくっていると、「これって季語だったの？」と思うようなありふれたものから、難しい漢字で初めて目にする言葉もあり、改めて日本語の季節感あふれる語彙の豊富さに圧倒される思いです。

俳句を始めてからというもの、何気なく過ごしていた日常が大きく変わりました。それは、今まで何となくやり過ごしていたものを改めて観察する事により、毎日新しい発見と感動があるからです。

ところが、その感動をいざ俳句に詠もうとするのは至難の業です。それでも頭の中に浮かぶ感動を　五・七・五　に当てはめて、俳句らしきもの？が出来た時の喜びはひとしおのものがあります。

俳句は、到達点のない深遠なる世界ですが、先生方の優しくも厳しいご指導を仰ぎながら、楽しみつつ一歩一歩学んでいく所存です。

自作自詠俳句研修会　実施事項

※　例会　毎月第二火曜日午後二時より

①　名句鑑賞・解説（当番制）

②　自作自詠

・自作俳句二句の紹介と一句自詠（独吟）

・俳友の感想、先生の句評

③　自選一句（新聞俳壇等）、紹介と選者範吟・合吟

④　翌月の兼題の選定

※　行事　吟行会（原則年二回）、懇親会、その他

※　句誌　「湧水」年一回発行